
保育・教職実践演習（教育コース 2年：後期）

ティーチング・ポートフォリオ

佐賀女子短期大学 こども未来学科 脇山 英靖

1. 教育の責任

こども教育コースの特色は、小学校教諭二種免許、幼稚園教諭二種免許、保育士の三免許取得である。三免許取得は、就職の幅が広げ、学生のキャリアアップに繋がる。将来設計に合わせた「強み」を手にすることができる。なかでも、小学校教諭二種免許の取得は、最速2年で小学校の教壇に立つことを可能にする。

2021年度（令和3年度）、佐賀県的小学校教員採用試験は、過去30年で最低倍率（1.4倍）である。しかし、2018年度（令和元年度）、本学の小学校教員採用試験、現役合格者は1名にとどまり、短大の「強み」を生かしきれていない。この状況を改善するため、令和2年度より本学は、佐賀県教育委員会と連携し、現役小学校教頭を准教授として招聘し、教員養成、採用試験合格者増につなげる取り組みを始めている。小学校教員を目指す学生の進路を保障する（結果を保証する）ことは、喫緊の課題である。

本科目は、「教育実践に関する科目」として位置づけられている。教育実習後のリフレクションにおいて、学生に自分の苦手分野、教育実習における課題を個別に出させ、課題克服に向けたプログラムに沿って演習を行う。本科目は、数か月後、社会に出る前に自分に不足しているものを補う、自己を客観視しスキルアップする術を身につけさせることに重きを置いている。このことは、本学科の学修成果「将来の小学校教諭・幼稚園教諭・保育士等としての目的意識を持ち、使命感と豊かな人間性を備えた人」、「基礎・基本の学力とともに、専門的知識や実践的スキルを身につけようと努力する人」と関連している。本科目では、教育者としての資質能力の素地作り（汎用的な学修成果）はもとより、教育現場で即戦力となる人材、小・幼・保連携の中核として活躍する人材育成に主眼を置く。

2. 教育の理念

本科目では、以下の3つをねらう。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">①これまで履修してきた授業や実習を踏まえ、小学校教諭及び幼稚園教諭として必要な資質・能力が身についたかどうか、検証、分析する。②教育実習を終え、自分の課題を見出し、不足する知識や技術を補う。③自信を持って教育職に就き、社会人として円滑なスタートができるようになるため、プレゼン力、アウトプット力を身につける。 |
|--|

具体的には、「事例研究やロールプレイング等を取り入れた演習」「教育実習で課題が見られた授業の分析・修正」「模擬授業」「学級通信作成」「保護者対応の演習」「自己紹介における教材づくり」「児童や保護者に対する聞き方・話し方演習」などを扱う。

小学校現役教師としての「強み」を生かし、「現場で役立つ」指導方法や指導技術を学生に

身につけさせる。実物資料、事例研究、模擬演習など、魅力ある課題を提示することで、常に自分事として学生に捉えさせる。

「小学校現場に対するイメージを具体的に持つことができた」「学級経営の実際を知り、具体的な指導技術や指導方法を身につける必要性を感じた」「将来の働き方に対する考えがより明確になった」「積極的に保護者や同僚の先生とコミュニケーションを図り、連携する必要性を感じた」「児童への言葉かけや指導の仕方など、教員に求められる基本的実践力を身に付けることができた」「学習内容に興味を持てた」「学生自身に考えさせる工夫がなされていた」「将来就職した際、役に立つ授業であった」などの項目で、「学生の満足度（数値）」を上げる。学生を授業目標に到達させるため、本授業では以下の3つに重きを置く。

- 〈1〉 対話や話し合い活動を積極的に取り入れ、常にアウトプットすることを学生に求める。
- 〈2〉 学生の発言（思考力・判断力・表現力）を授業内容に関連させ、展開することを通して、「主体的で対話的で深い学び」の実現（授業のアクティブラーニング化）を図る。
- 〈3〉 毎回、授業ノートの提出を学生に求め、コメント、評定を行い、フィードバックすることを通して、学生に学びの有用感を持たせる。

3. 教育の方法

■授業内容・方法

「1. 教育の責任」「2. 教育の理念」を受け、授業では以下の内容・方法で進める。

- いじめや学校事故、保護者対応など、小学校現場で実際に起こった事例をもとに、演習形式で行う。
- 小学校の教科書教材や授業動画をもとに、グループワークや演習を行い、検討をしたり、分析したりする演習を行う。
- 学校経営案、学級経営案、学級通信、保護者懇談会資料、校内研究資料、年間指導計画、指導案、授業動画など、実物資料を提示し、現場で役立つ指導方法、情報の共有化を図る。
- 学級通信作り、自己紹介に必要な教材や教具の作成、指導計画作成に取り組みさせる。
- 個別に模擬演習を行わせ、表現方法や言葉遣い、表情、児童への対応などについて、学生による相互評価を行わせる。結果を学生にフィードバックを行い、現場で役立つ力を身につけさせる。
- 学生のスキルアップ、情報活用力を身につけさせるため、sns や youtube による情報収集、web 上の実践を活用し、アウトプット力を身につけさせる。
- 小学校に出向き、研究授業を学生が参観し、小学校教員による事後指導を受ける。
- 保育実習や教育実習におけるリフレクションを取り入れ、改善策を具体的に立てさせる。
 - ・表現力、アウトプット力を磨くための実演・演習を取り入れる。
 - ・学生に自分の苦手分野、実習における課題を個別に出させ、課題克服に向けた演習を行う。

■教育の成果における測定

成果の測定（ディプロマポリシーの到達度）は、授業を行った結果である「学生の実績」を重視する。具体的には、以下の3つで測定する。

- (1) 成績評価「秀・優・良・可・不可」の分布
- (2) 「授業評価アンケート」
 - ・本学が全学生、全科目対象に実施する「授業をより良くするためのアンケート」ある。
 - ・5段階評価のうち「5：とても当てはまる」「4：まあまあ当てはまる」を回答した学生の割合を数値化し、全体平均（全学部、全授業回答の学生回答率）と比較する。
- (3) 「授業満足度アンケート」
 - ・授業終了後、授業者が学生に行った独自のアンケートである。
 - ・5段階評価のうち「5：とてもよかった」「4：まあまあよかった」を回答した学生の割合を数値化する。

4. 教育の成果

(1) 成績評価「秀・優・良・可・不可」の分布

秀 28.6% (4名)、優 57.2% (8名)、良 14.2% (2名)、可 0% (0名)、平均 85.0点である。成績分布から見ても、妥当な範囲であり、下位層が少ない。到達度から見ても、ボトムアップにつながっている。

(2) 「授業評価アンケート」

※「全体平均」: 全学部、全授業回答の学生回答率をさす

① 「あなた自身の授業態度について」

- ・「1.授業の内容に関心を持ち、積極的に取り組んでいる
(グループワークや課題・ノートをとる・発言する など)」
- 「5:とても当てはまる」75% (全体平均 32%)、
「4:まあまあ当てはまる」まで加えると92% (全体平均 76%)
- ・「2.疑問点などは積極的に質問するように努めている」
- 「5:とても当てはまる」42% (全体平均 27%)、
「4:まあまあ当てはまる」まで加えると92% (全体平均 65%)

結果をみても、積極的に授業に参加し、意欲的に取り組んでいる学生が多いことがわかる。しかし、積極的に質問したりする項目には、課題が見られた。授業構想、組み立て方を改善し、アクティブラーニングを重視した授業展開が必要である。

② 「担当教員と授業について」

- ・「1.話し方や説明の仕方がわかりやすい」
- 「5:とても当てはまる」67% (全体平均 32%)、
「4:まあまあ当てはまる」まで加えると92% (全体平均 72%)
- ・「2.授業の目的や進め方が明確である」
- 「5:とても当てはまる」67% (全体平均 34%)、
「4:まあまあ当てはまる」まで加えると84% (全体平均 72%)
- ・「3.学習内容に興味を持てるような工夫がなされている」

- 「5:とても当てはまる」 75 % (全体平均 32 %)、
「4:まあまあ当てはまる」まで加えると 92 % (全体平均 70 %)
- ・「4.学生自身に考えさせる工夫がなされている」
- 「5:とても当てはまる」 83 % (全体平均 35 %)、
「4:まあまあ当てはまる」まで加えると 93 % (全体平均 74 %)
- ・「5.学生の理解を確認しながら授業を進めている」
- 「5:とても当てはまる」 42 % (全体平均 32 %)、
「4:まあまあ当てはまる」まで加えると 84 % (全体平均 71 %)
- ・「6.学生の質問や疑問に適切に答えている」
- 「5:とても当てはまる」 42 % (全体平均 36 %)、
「4:まあまあ当てはまる」まで加えると 84 % (全体平均 73 %)
- ・「7.成績評価の方法や基準が明らかにされている」
- 「5:とても当てはまる」 67 % (全体平均 33 %)、
「4:まあまあ当てはまる」まで加えると 84 % (全体平均 71 %)

「5」については、全体平均をすべて上回った。「4」まで加えた場合も、同様である。学生の質問や疑問を授業ごとに把握し、フィードバックする必要がある。また、学生の理解度を把握しながら、授業を進めるところに課題が見られた。すべての項目において、全体平均を上回り、学生の満足度を保障することができた。

③ 「学生による到達度評価」

- (1) 「3.この授業の到達目標を十分に達成した」
- 「5:とても当てはまる」 33 % (全体平均 29 %)、
「4:まあまあ当てはまる」まで加えると 91 % (全体平均 73 %)
- (2) 「4.この授業に対して、5段階で総合的に評価してください。(5が最も良い評価)」
- 「5:とても当てはまる」 50 % (全体平均 30 %)、
「4:まあまあ当てはまる」まで加えると 92 % (全体平均 73 %)

(1) (2) については、「5」「4」とも、全体平均を上回り、一定の成果が見られた。学生が授業内容の有用性を感じさせる授業づくりは、急務である。学生個々に教育実習の反省を生かした課題を作らせ、個別に取り組み、現場に直結する演習を取り入れたことが、功を奏したと推測する。学生自身が学びの有用感をおぼえ、「自分のキャリアアップに役に立つ」「社会に出てから必要だ」と感じさせる授業内容を模索する必要がある。今年度は、コロナ禍のため、小学校や幼稚園の現役教師の話を聞いたり、教育現場での調査や実習に出かけたりすることができなかった。

(3) 「授業満足度アンケート」

- 【調査日時】 2023年1月末
- 【調査対象】 こども未来学科:教育コース2年(17名)
- ※ 5段階評価のうち「5」「4」を回答した学生の割合をさす
- 「5 とてもよかった」「4 まあまあよかった」「3 よかった」
- 「2 どちらかといえばよくなかった」「1 よくなかった」

- ・「①保育・小学校の実情を知ること、現場に対するイメージを具体的に持つことができた」
→ **94.1 %**
- ・「②教育実習を終え、自分の課題（専門的知識・技能）を明確にすることができた」 → **100 %**
- ・「③実践・演習を通して、専門的知識や指導方法を身につける必要性を感じた」 → **100 %**
- ・「④実践・演習を通して、現場の授業や指導方法に対する考えがより明確になった」 → **100 %**
- ・「⑤園児や児童の学びの跡をたどり、個別に対応する必要性を感じた」 → **100 %**
- ・「⑥小学校現役教師を授業に招いた講義は、役に立った」 → **100 %**
- ・「⑦実践演習（アウトプット力を磨く）は、参考になった」 → **100 %**
- ・「⑧園児や児童への言葉かけ、対応の仕方など、求められる基本的実践力を身に付けることができた」 → **92.9 %**
- ・「⑨保育や小学校教育に対する見方や考え方が良い方へ変わった」 → **100 %**
- ・「⑩講義での演習（通信作り・自己紹介・人前で話す・発表など）は、参考になった」 → **100 %**
- ・「⑪講義（演習）を通して、以前より積極的にノートを取ったり、自分の考えをまとめたりするようになった」 → **100 %**
- ・「⑫講義（演習）を通して、以前より積極的に友達の話しを聞いたり、話し合ったりするようになった」 → **92.9 %**
- ・「⑬教師に求められる資質・能力を知り、日々の生活でも意識するようになった」 → **92.9 %**
- ・「⑭「保育園・幼稚園・小学校教員っていいな」「楽しそうだな」という思いが強くなった」
→ **100 %**

5段階評価のうち「5」「4」を回答した学生の平均は、**98.5 %**であった。
すべての項目において、学生の回答は「3」以上であった（100%）。
すべての項目において、9割以上の到達率である。

（４）授業改善取組による授業見学

- ◆実施日：令和4年12月16日（金） 3校目
- ◆対象：こども未来学科（教育コース）2年 14名（当日1名欠席）

[1] 授業改善目標

- ・小学校現役教員として、実践をもとに、小学校の授業の実際と児童への指導方法に関し、演習を取り入れ、授業で学生を巻き込む（学びに必要感を持たせる）。
- ・多くの学生を指名し、学生の発言をもとに授業を作る。アクティブラーニングを重視した講義を行う。
- ・講義を通して、「小学校・保育現場って楽しいな」「小学校教師・保育士・幼稚園教諭になりたい」という思いを持たせ、具体的な指導方法や指導技術を身につけさせる。

[2] 授業者による振り返り・自己評価

- ・前回の授業で作成した、学級通信をもとに、「保育園・幼稚園または小学校の先生になったつもりで、5分間原稿を見ずに、保護者や児童に話す（語りかける）」演習を試みた。
- ・話す対象、時間帯、児童や園児の年齢等、就職先の実態に合わせ、学生本人に決定させたことで、切実感が生まれ、4月から現場に立つ意識を持たせながら演習させることができた。
- ・学生は、「導入のつかみ（15秒）」「聞き手への目線」「リズムとテンポ」「明確な言葉遣い」「あたたかな表情・対応」など、5観点を意識させた。
- ・学生には、練習時間を設け、グループで見せ合う場を設定した。
- ・学生の発表（アウトプット）をもとに授業を行い、アクティブラーニングを重視した授業を展開することができた。
- ・学生の発表発言をもとに、一步突っ込んだ発問を行った。学生にも切実感が生まれ、「自分が児童なら」「親として」「同僚として」という観点で、教育者として話すことがいかに難しく、大切であるか、疑似体験することができた。
- ・「なぜ原稿を見ないのか」「教師のエピソードを入れるのか」「目線はどのように動かすのか」「声のトーン・間を作る意味は何か」など、理論ではなく、教育場の実情を踏まえながら、学生に体得させることができた。
- ・学生の発表に、話術の5観点「声の強弱・目線・間の取り方・ジェスチャー・表情」を与えたことで、分析する観点や話し合う観点が明確になり、活発な話し合いが展開された。学生が身を乗り出し話し合わせるには、教師のすぐれた発問・指示が欠かせない。学生をつぶやきを引き出し、アウトプット力を磨く授業をすることができた。
- ・演習を通して、「表現力・コミュニケーション力・発信力を磨くにはどうしたらよいのか」「児童の困り感にどのように関わっていくのか」「児童にどのような資質・能力を身につけさせるのか」など、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて、不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることを学生に実感させることができた。

[3] 参観者による感想・助言

- ・どの学生も個性があり、他の授業とは違う学生の一面を見ることができた。
- ・学生の表現力が素晴らしく、自信を持って取り組んでいるのがわかる。
- ・学生同士、互いにコメントすることによって、学び合う風土が醸成されている。
- ・教員の代案や指名の仕方によって、「いつ指名されるのか」緊張感を持って、授業を参観することができた。
- ・教員の日頃の声かけ、指導の反映によって、学生に力がつくのだと思った。
- ・学生の発表に対する、教師のコメント（評価）が的確であった。まねしたい。
- ・声の強弱や伝わりやすい表情など、社会人としてのスキルが身につく授業だった。
- ・学生のアウトプットに対し、先生の代案が具体的で、学生に力がつくと感じた。
- ・学生が「わかる」「かわる」「応える」授業であり、学びの質が保障されていた。
- ・学生たちの発表力は、かなり向上している。今後のさらなる進歩を期待したい。

授業を参観してもらうことで、学生の取り組み、授業内容の質、教員の指導言（発問・指示）

など、授業行為についても客観的に意識することができた。「学生の満足度」を向上するには、授業にアクティブラーニングを取り入れるだけでなく、教員の授業力向上こそ、急務である。

5. 目標

- 学生の「わかる」「できる」を保障する授業の構築に向け、授業のさらなる質的改善をめざす。具体的には、教師のプレゼン力、話術、Ipad を駆使した ICT 利活用技術など、教員自身の授業力向上は急務である。「学生の満足度」を上げるには、継続して「開始導入のつかみ・明確な発問指示・リズムとテンポ・温かな対応」など、具体的に「授業の腕を磨く」必要がある。
- 授業力に特化した研修会や授業を相互に参観する機会を増やし、授業の客観性を高める。
- コロナ禍のため、実現できなかったが、次年度は小学校に出向き、授業参観する演習も取り入れたい。不可能ならば、小学校教師に授業風景を録画してもらい、ビデオ視聴による検証、分析を行う。
- 小学校現役教師を招き、直接指導を仰ぐ機会を多く取り入れたい。保育現場への調査、参観など、授業に対する学生の有用感を高める授業内容に変えていく。
- 定期的に学生に授業アンケートをとり、その内容を検討しながら、授業に反映させる授業を行う。シラバスだけではなく、学生に毎時間の到達度目標を明確に示し、毎時間確実に習得させる、学生に目に見える形でフィードバックする必要がある。
- 学生の就職先がほぼ決定している時期であるため、就職先に合わせて準備させたり、アウトプット力を明確に示したりするなど、一層個別に対応する必要がある。
- 本学では、小学校の教育実習が採用試験後（10月）に設定されている。小学校教員養成に力を入れる大学としては、カリキュラム編成に課題を抱えている。大幅な改善が必要である。
- 本授業を他の教科教育の授業や現役教員を招いた学習会「教師塾」（時間外）と関連させ、現場で即戦力となる学生の養成に力を注ぎ、「短大と現場を繋ぐ」必要がある。